



平成19年3月11日(日) 春季観音大祭にて

観音

平成20年3月
第42号

発行
中町 郡府中町
2丁目2-8-4
真言宗 正観寺
小出 真真 行弘

街角の仏様

檀家さんのお参りから帰る途中でした。

歩道を歩いていたら、二、三十メートル向こうの街角に、通園バスを待っているらしい幼稚園児の姿が見えました。と、その女の子らしい園児が、ふと私の姿を認めた途端、両手を合わせて合掌してくれました。それを見た弟らしい二つか三つぐらいの男の子も、同じように可愛い手を合わせて合掌してくれました。二人の合掌は誰に催促されたのでもなく、また面白半分でもからかいでもありません。全く自然な姿で、ごく真面目に手を合わせてくれたのです。

私は突然のことなので、思わずハッと立ち止まりました。回りを見回しましたが、他に誰も居ず、それが私に対してなされた合掌だということとは間違いありません。次の瞬間、二人の幼子の姿は、ごく自然に元の姿に戻っていました。

ほんの瞬間に近い出来事でしたが、私には、その時の二人の合掌の姿がこの上もなく尊い、まるで仏さまのような姿に見えたのです。それは、決して私に合掌してくれた嬉しさからではありません。合掌の姿があんなにも美しく尊く見えたこと

真言は不思議なり。観誦すれば無明を除く。
一字に千理を含み、即身に法如を証す。
真言は、まことに不思議である。その文字の形を観じ、その意味を尋ねてよく憶念するならば、心の闇の迷いを除いて、心はずがすがしい清らかな菩提心が光り輝くようになる。
般若心経秘鍵

は、今までに経験したことがなかったのです。まさに眼を洗われるような衝撃的な印象でした。

二人の幼児は、何かをお願いする気持ちで合掌したわけではないでしょうし、また誰かに褒めてもらうために手を合わせたのでもないでしょう。お坊さん↓仏様↓手を合わせる、という連想で自然に手が合掌の形をとったに違いありません。そこなんの意図もなく、自然な合掌であっただけに、かくも美しく、尊く見えたのだと思います。

普通、私たちは仏さま(この場合は仏像)に対して合掌すると言いますが、その時、そこに仏さまと私があるのではなく、実は、合掌する私たちが仏になっているのです。いや、そこに仏像があるのがなからうが、合掌すれば、いつでもどこでも私たちは仏さまになっているのです。ただし、私利を願って合掌するのでは仏にはなれません。私心を捨て、心からただ合掌するときのみ、仏になれるのです。そのことを、今までは頭の中で理解していたのですが、今回初めてそれが実感出来ました。

「負う子に教えられ」ではなく、「坊主が幼児に教えられ」というところででしょうか、有り難いことです。



専修学院(寶壽院)布薩にて



九度山托鉢にて



金剛峰寺伽藍にて



寶壽院庭儀大曼茶羅供
經立誦經別行の供具



金剛峰寺 涅槃会にて



奥の院 萬燈会にて

お大師さまと十三仏

な みも立ちます火も燃える 中にまします不動さま
 む かしも今もこの身こそ 覚めよと告げるお釈迦さま
 だ れにもあるぞまことの智 知れと教える文殊さま
 い つもかわらずあるままに ほとけと教える普賢さま
 し ずかなえみをうかべては 路傍にいます地藏さま
 へ だつと思うな未来の世 はるかも今なり弥勒さま
 む じょうなる身のやまいをぞ 除き払わる薬師さま
 じ ひのところで音をきき 感応まします観音さま
 よ がんの印もてはげませる 威勢大なる勢至さま
 う つつなる身も無量なり あまねく済う阿弥陀さま
 こ んごうのごと魔をくだく まどかなる智恵の阿闍さま
 ん と口をとじ終わる身も 帰するところは大日さま
 ご うの火燃える身も空と 教えまどかな虚空蔵
 う きよなれこそありがたし 南無大師遍照尊
 (二字目にご宝号をよみこんでいます)

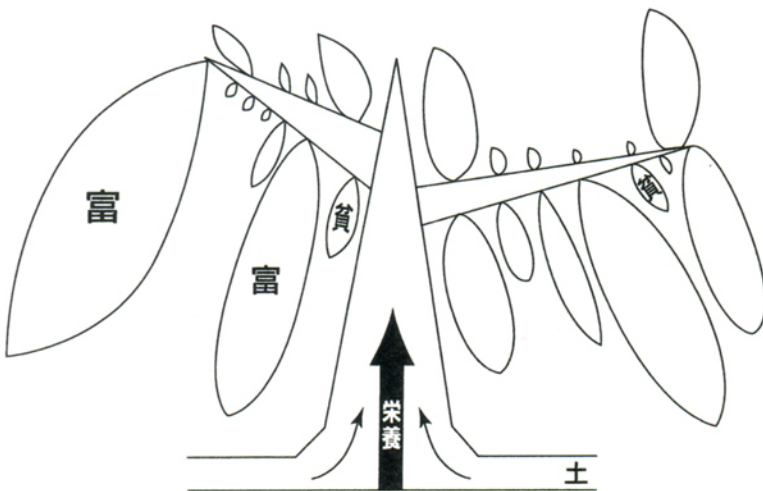
旅の「コラム」

私がミャンマーに旅をしていた時のことです。不思議に気が合ったミャンマー人の青年とスラム街を通り過ぎようとしていると、このよな言葉と絵を頂きましたのでご紹介致します。

「実はね。世界の中心には大きな一本の木が立っているんだ。その大きな木にはもちろん枝があつてね、そこには葉っぱが茂っている。一見とても立派な木に見えるよね？でもよく見てごらん？その葉っぱの大きさが違っていきるのがわかるかい？当然同じ栄養をもらわなければならぬはずの葉っぱなのに……どうしてなのかな……？」

うつろな目をして彼はこうつぶやいていました。

皆さんいろいろな捉え方、考え方があられると思います。いろいろな例に例える事も出来ると思います。自分なりにお考えになってみてはいかがですか？



回向について

回向は廻向とも書きますが、これは梵語のバリナームを訳した言葉で、回轉廻向を略して回向と言うのです。

自分自身が仏道を勤行する功德を回らし転じて、生者死者を問わずあらゆる人へ趣き向けることを言います。

お経の終わりに

「願わくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」

とお唱えしますが、これを回向文と言います。「此の功德」というのは、仏様にお供えをしお経を読む功德であり、「普く一切におよぼし」というのは、ただ自分の家の聖霊に回向するだけでなく、一切の有縁無縁の生ける者と死せる者、さらにすべての生き物たちに功德が及ぶように、ということとです。また「我等と衆生」との衆生とは、衆くの生を経て生きているもの、すなわち生きているものすべてを指すのです。

仏教が慈悲の宗教であるというのは、この回向という言葉ひとつを取ってもよく分かります。善きことを自分のことだけにしないで、すべての人に普く回らし向け、その善きことが世界のすみずみまで及ぶようにと願うこと、それが回向であり、仏教の慈悲の心のあらわれにほかなりません。

如実知自心

—ありのままのじぶんを知る

だれも思っているでしょう、

自分の心は自分が一番よく知っていると。

それでは、自分の心を取り出して

テーブルの上におき、

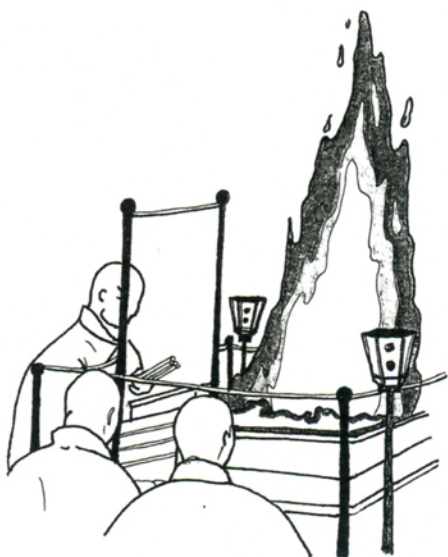
りんごを描くように見つめてごらん。

それはりんごのように、じっとしていますか。

りんごに触れるように手に取れますか。

自分の一番近くにあつて、最も遠くにあるもの。

心とは不思議なもの。



○平成二十年度 年間行事予定

一月一日～三日	修正会
二月三日	星祭(星供)
三月一日～二十二日	彼岸参り
三月九日	観音大祭(柴燈護摩)
三月二十三日	彼岸法要
四月十三日～十五日	小豆島巡拝
七月六日～七日	石鎚山参拝
八月一日～二十二日	盆参り
八月十七日	盂蘭盆会
八月二十四日	地藏祭
九月一日～二十二日	彼岸参り
九月二十三日	彼岸法要
十二月三十一日	年越祭

毎月十八日に月並観音供(内護摩)
十八日が祝日、日曜日の場合は、二十一日
に月並大師供(内護摩)を厳修
御詠歌講習会(月一～二回程度)

参加者募集

一、平成二十年四月十三日(日)

～十五日(火)二泊三日

『小豆島巡拝』費用 三七、〇〇〇円

二、平成十九年七月六日(日)

～七日(月)一泊二日

『石鎚山参拝』費用 三三、〇〇〇円

※お問い合わせ(正観寺)

〇八二―二八二―五六六二迄